

生駒市の子育て支援事業における ボランティア参加学生の学び

Study on the learning of volunteer students to Child-Raising Support Program of Ikoma City

石田 慎二¹

Shinji Ishida

本稿では、「サンデーひろば」へボランティアとして参加した学生がどのような内容を具体的に学んでいるのかを明らかにするとともに、ボランティア参加学生の学びを深めていくための課題について考察した。方法としては、2019年度に「サンデーひろば」への参加登録をした学生を対象としてアンケート調査を実施して分析した。その結果、ボランティア参加学生の学びを深めていくための課題として、①目標を定めて参加すること、②保護者との会話の促進、③学びのプロセスの明確化の3点が挙げられた。

1. 研究の背景と目的

1) 2019年度生駒市の子育て支援事業「サンデーひろば」への参加状況

生駒市と帝塚山大学は2005年10月から学市連携の協定を結んでいる。その協定のもと、生駒市の子育て支援事業のひとつとして実施している「サンデーひろば」に帝塚山大学の学生が毎年、ボランティアとして参加している。

「サンデーひろば」は、おおむね月に1回、原則第1日曜日の午前中に2時間（9時30分から11時30分）開催されている。対象は就学前の子どもとその保護者であり、保育士や学生ボランティアによる保育施設を利用した園庭や室内での遊び、看護職員による子育て相談などを行っている¹⁾。2019年度は、4月、8月、1月を除いて年間9回開催される予定であったが、3月は新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から中止となったため、年間8回の実施となった。

学生ボランティアは、毎年の年度初めに参加登録をしたうえで参加することになるが、2019年度の参加登録者は57名で、学年別の内訳は、1年生が8名、2年生が31名、3年生が8名、4年生が10名であった。また、学生ボランティアの参加状況をみると、延べ152名の学生が参加しており、最も多く参加した学生は8回中7回参加していた。その一方で参加登録はしたが1度も参加しなかった学生もいた。

各回の学生ボランティアの参加人数をみると、5月が36人、6月が33人、7月が26人、9月が4人、10月が20人、11月が17人、12月が12人、2月が5人であった。例年、後半になるにつれて参加人数は減少傾向にあるが、9月が極端に少ないのは2、3年生が学外実習中であることに加えて、4年生が就職活動のため参加しづらくなっているからであると考えられる。また、2月は大学の後期試験期間直前であったため参加者が少なくなったと考えられる。

¹ 帝塚山大学 教育学部 教授

2) 研究目的

本稿の目的は、「サンデーひろば」へボランティアとして参加した学生がどのような学びをしているのかを明らかにすることである。岡澤（2017）は、「サンデーひろば」に参加した学生が毎回の事業後に記入した振り返りシートの分析結果から、1年生より2年生の自己評価が高く3年生では自己評価が低くなること、参加回数が多くなると自己評価が低くなることを明らかにしている。また、多数回参加の学生の自己評価が低くなっていく理由として、参加回数を重ねるごとに視野が広くなり、評価の比較対象が広がってくることなどにより自分ができなかったことがみえるようになること、つまり、初めは自己を過大評価しているが、様々な体験を通して、自己を適切に評価できるようになったことを挙げている。

ただし、岡澤（2017）は振り返りの項目として設定した12項目の設問の回答合計を参加回数で割った平均を、個人自己評価得点として算出して分析を行っているため、個々の項目の学びについては分析が行われていない。

そこで、本稿では、「サンデーひろば」へボランティアとして参加した学生がどのような内容を具体的に学んでいるのかを明らかにするとともに、ボランティア参加学生の学びを深めていくための課題について考察する。

2. 研究の方法

1) 調査の対象

本調査は、2019年度に「サンデーひろば」への参加登録をした57名の学生を対象として実施した。

2) 調査の方法と実施期間

調査はアンケート調査法で実施した。調査は、2020年2月3日から2月7日までの期間で、アンケート調査票を参加登録者へメールで配付し、記入したアンケート用紙をメールでの提出または回収箱への提出により回収した。アンケート調査票の回収数は45、有効回収率は78.9%であった。

3) 調査の内容

主な調査項目は、①参加回数、②「サンデーひろば」における体験内容、③「サンデーひろば」における学びの自己評価とした。学びの自己評価の項目は、岡澤（2017）が振り返りの項目として設定した12項目を用いた。

4) 分析方法

「サンデーひろば」における学びの自己評価については、12項目について「全くできなかった」、「できなかった」、「ややできなかった」、「ややできた」、「できた」、「よくできた」の6段階で評定を求め、「全くできなかった」（1点）から「よくできた」（6点）として分析した。統計処理にはSPSS Statistics 23を用いた。

5) 倫理的配慮

対象者には、アンケート調査の目的、匿名性の厳守、研究目的以外でデータを使用しないことを説明したうえで実施し、回答をもって同意を得たものとした。

3. 結果

1) 学年および参加回数

ボランティア参加学生の学年をみると、「2年生」が28人(62.2%)で最も多く、次いで「4年生」が7人(15.6%)、「1年生」と「3年生」がともに5人(11.1%)であった。また、参加回数は、「2回」が12人(26.7%)で最も多く、次いで「3回」11人(24.4%)、「6回」5人(11.1%)であった(表1)。

「0回」と回答した学生に、自由記述で参加しなかった理由を尋ねたところ、「自分の住む地域のこども園に(ボランティアに)行かせてもらうことになったため」「別の用事が入り都合が合わなかったため」「日程が合わなかったため」といった理由が挙げられた。

表1 参加回数

	度数	%
0回	4	8.9
1回	3	6.7
2回	12	26.7
3回	11	24.4
4回	4	8.9
5回	4	8.9
6回	5	11.1
7回	2	4.4
合計	45	100.0

2) 「サンデーひろば」における体験内容

「サンデーひろば」における体験内容については表2に示した。「園庭での子どもとのかかわり」が90.2%で最も多く、次いで「保護者との会話」70.7%、「室内での子どもとのかかわり」63.4%、「受付」43.9%、「学生企画」26.8%、「保育士の企画の補助」24.4%であった。

表2 体験内容

	度数	%
受付	18	43.9
園庭での子どもとのかかわり	37	90.2
室内での子どもとのかかわり	26	63.4
保育士の企画の補助	10	24.4
学生企画の実施	11	26.8
保護者との会話	29	70.7

3) 「サンデーひろば」における学年別の自己評価得点

学びの自己評価の12の設問の回答合計を個人自己評価得点として算出した。図1には、学年別

の自己評価得点の平均を示した。1年生の得点は50.80であったが、2年生で54.64と得点が最も高くなっており、3年生では50.33、4年生では48.14と低下している。ただし、一元配置分散分析の結果、学年別の平均値に統計的な有意差はみられなかった。

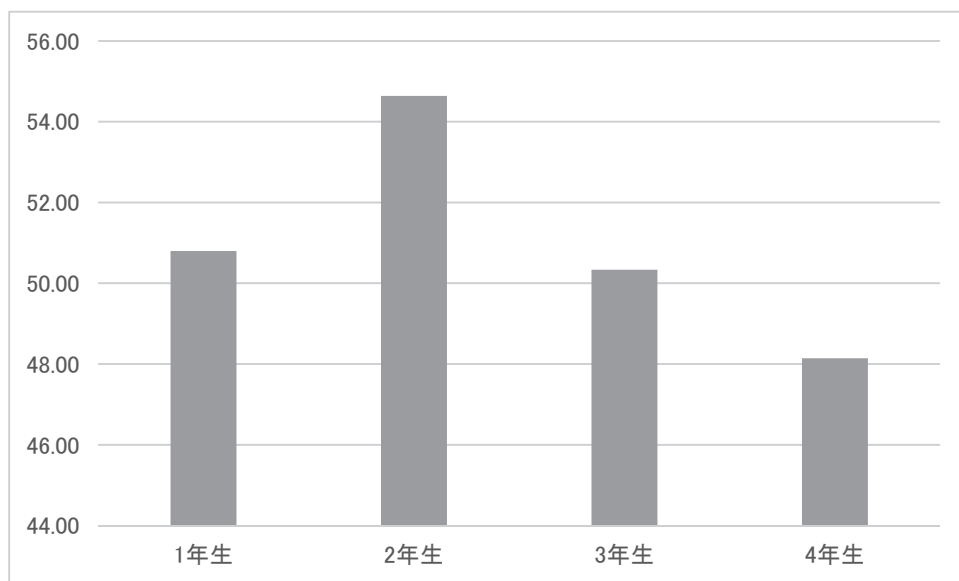


図1 学年別の自己評価得点

4) 「サンデーひろば」における学びの自己評価

表3には、「サンデーひろば」におけるそれぞれの学びの自己評価の平均を示した。平均が高かった項目をみると、「子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること」(4.85)が最も高く、次いで「子どもの目線に合わせたかかわりをする事」(4.68)、「子どもに対して言葉掛けをする事」(4.60)、「子どもと楽しいかかわりをする事」(4.58)となっている。

表3 学びの自己評価

項目	平均値
子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること	4.85
子どもの目線に合わせたかかわりをする事	4.68
子どもに対して言葉掛けをする事	4.60
子どもと楽しいかかわりをする事	4.58
子どもの興味や関心を理解すること	4.50
子どもが話すことばを理解すること	4.45
子どもに対してその場にあった援助をする事	4.33
子どもの年齢にそって遊ぶこと	4.33
子どもと積極的にかかわること	4.30
子どものしている行動の意味をよみとること	4.08
毎回目標を定め、それに基づいて行動すること	4.03
保護者と会話すること	4.00

一方、平均が低かった項目をみると、「保護者と会話すること」(4.00)、「毎回目標を定め、それに基づいて行動すること」(4.03)、「子どものしている行動の意味をよみとること」(4.08)となっている。

5)「サンデーひろば」における学年別の学びの自己評価

表4および図2には、「サンデーひろば」におけるそれぞれの学びの自己評価の平均を学年別に示した。いずれの項目も一元配置分散分析の結果、学年別の平均値に統計的な有意差はみられなかったが、それぞれの項目のおおまかな傾向をみると、以下ようになる。

①子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること

1年生は5.20であったが、2年生4.92、3年生4.33と低下し、4年生で4.57と上昇している。

②子どもの目線に合わせたかかわりをする

1年生は4.60であったが、2年生は4.84と上昇し、3年生は4.00と低下、4年生は4.43と再び上昇している。

③子どもに対して言葉掛けをすること

1年生は5.00であったが、2年生4.64、3年生4.33、4年生4.29と学年が上がるごとに低下している。

④子どもと楽しいかかわりをする

1年生は4.60であったが、2年生は4.84と上昇し、3年生4.00、4年生3.86と低下している。

⑤子どもの興味や関心を理解すること

1年生は4.20であったが、2年生4.64、3年生4.67と上昇し、4年生は4.14と低下している。

⑥子どもが話すことばを理解すること

1年生は4.60であったが、2年生4.56、3年生4.33、4年生4.00と学年が上がるごとに低下している。

⑦子どもに対してその場にあった援助をすること

1年生は3.80であったが、2年生は4.64と上昇し、3年生4.00、4年生3.71と低下している。

⑧子どもの年齢にそって遊ぶこと

1年生は4.00であったが、2年生は4.60と上昇し、3年生4.33、4年生3.57と低下している。

⑨子どもと積極的にかかわること

1年生は3.60であったが、2年生は4.52と上昇し、3年生4.33、4年生4.00と低下している。

⑩子どものしている行動の意味をよみとること

1年生は4.00であったが、2年生は4.20と上昇し、3年生は3.67と低下、4年生は3.86と再び上昇している。

⑪毎回目標を定め、それに基づいて行動すること

1年生は3.40であったが、2年生は4.20と上昇し、3年生4.00、4年生3.86と低下している。

⑫保護者と会話すること

1年生は3.80であったが、2年生4.04、3年生4.33と上昇し、4年生は3.86と低下している。

表4 学年別の学びの自己評価

項目	1年生	2年生	3年生	4年生
子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること	5.20	4.92	4.33	4.57
子どもの目線に合わせたかかわりをする	4.60	4.84	4.00	4.43
子どもに対して言葉掛けをすること	5.00	4.64	4.33	4.29
子どもと楽しいかかわりをする	4.60	4.84	4.00	3.86
子どもの興味や関心を理解すること	4.20	4.64	4.67	4.14
子どもが話すことばを理解すること	4.60	4.56	4.33	4.00
子どもに対してその場にあった援助をすること	3.80	4.64	4.00	3.71
子どもの年齢にそって遊ぶこと	4.00	4.60	4.33	3.57
子どもと積極的にかかわること	3.60	4.52	4.33	4.00
子どものしている行動の意味をよみとること	4.00	4.20	3.67	3.86
毎回目標を定め、それに基づいて行動すること	3.40	4.20	4.00	3.86
保護者と会話すること	3.80	4.04	4.33	3.86

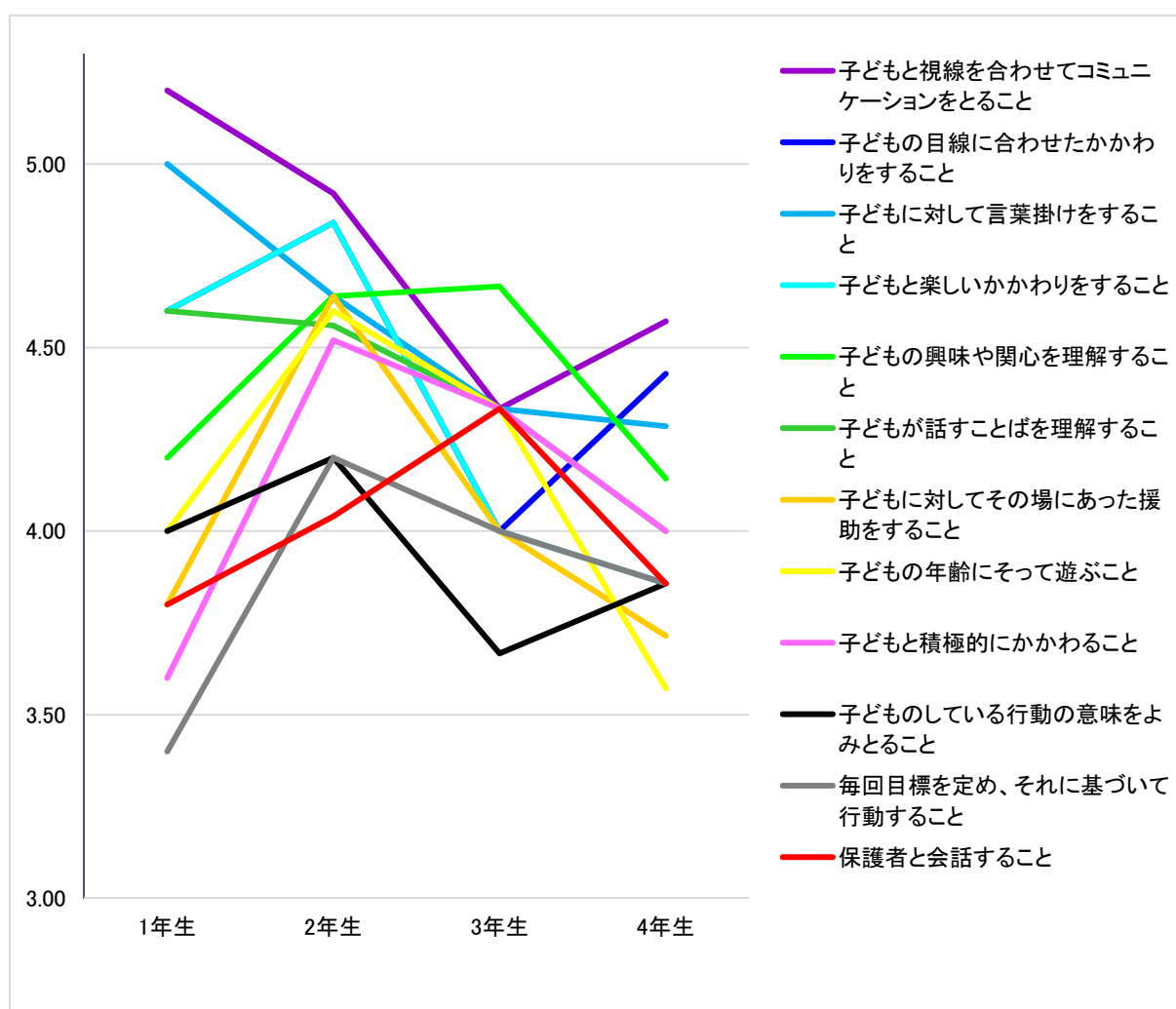


図2 学年別の学びの自己評価

4. 考察

以下では、アンケートの分析結果を踏まえて、「サンデーひろば」へのボランティア参加学生の学びを深めていくための課題について考察する。

1) 目標を定めて参加すること

「サンデーひろば」における体験内容としては、「園庭での子どもとのかかわり」、「室内での子どもとのかかわり」の割合が高く、また「子どもと視線を合わせてコミュニケーションをとること」、「子どもの目線に合わせたかかわりをする」、「子どもに対して言葉掛けをすること」、「子どもと楽しいかかわりをする」の自己評価が高いことから、ボランティア参加学生は子どもとコミュニケーションをとったり、楽しいかかわりをしたりすることは意識的にできていることがうかがえる。

その一方で、「子どもに対してその場にあった援助をすること」、「子どもの年齢にそって遊ぶこと」、「子どものしている行動の意味をよみとること」の項目に関しては、上記の項目と比較すると自己評価が低く、ボランティア参加学生は子どもへのかかわりについて深い学びにまでは至っていないことがうかがえる。

「毎回目標を定め、それに基づいて行動すること」の自己評価が全体としてみると低くなっており、また1年生と比較して2年生では上昇しているが、3年生、4年生では学年が上がるごとに低下していることから「サンデーひろば」への参加にあたって目標を定めることの意識が薄いことがうかがえる。このことが、ボランティア参加学生が子どもへのかかわりについて深い学びにまでは至っていない要因のひとつとして考えられる。

今後は、毎回の参加にあたって、事前にその日の目標を明確にすること、またそのためにどのように行動すべきかをボランティア参加学生に意識させるような働きかけを大学として行っていくことを検討する必要がある。また、毎回の振り返りもしっかりと行えるような仕組みを作っていくことは、次の参加に向けて適切な目標を定めていくための有効な手段となると考えられる。

2) 保護者との会話の促進

「サンデーひろば」における体験内容としては、「園庭での子どもとのかかわり」に次いで「保護者との会話」の割合が高かった。活動全体としては園庭、室内を含めて子どもとのかかわりが中心となっているが、ボランティア参加学生はそのかかわりのなかで子どもの保護者とも会話をしていることがうかがえる。

児童福祉法や保育所保育指針において保護者支援や地域の子育て支援の必要性が示されているが、保育実習等の学外実習においては保護者とのかかわる機会は少ないため、子どもとのかかわりのなかで自然と保護者と会話ができる「サンデーひろば」は学生にとって貴重な体験の場になっているといえる。「保護者と会話すること」の自己評価は全体としてみると低くなっているが、保護者との会話の促進するためにも、毎回の参加にあたっての目標設定や振り返りにおいて、子どもとのかかわりだけでなく、保護者とのかかわりを意識できるように大学として行っていくことを検討する必要がある。

また、保護者との会話ができるということが「サンデーひろば」における体験の特徴ということをして学生へ伝えることで、「サンデーひろば」への参加の動機付けになると考えられるため、ボランティア募集の際などに強調して伝えていくことも求められる。

3) 学びのプロセスの明確化

学年と学びの自己評価得点の関係をみると、1年生と比較して2年生の自己評価得点の平均が上昇し、3年生、4年生では学年が上がるごとに自己評価得点の平均が低下していた。岡澤(2017)の研究も同様の結果を示しており、1年生の時よりも自信を持ってかかわることができるようになる一方で、岡澤(2017:24)が指摘するように「まだ保育の基盤に関する力不足に気づけず自己を過大評価している可能性」も考えられる。また、3年生、4年生は、教育実習などの経験を経て「できなかったことや自分への課題を見出すことができるようになるため、自己評価得点が2年生より低くなった」(岡澤2017:24)ということが考えられる。

ただし、2019年度は2年生の参加が圧倒的に多く、他学年の参加が少なかったこともあり、本研究では学年と学びの自己評価得点の間に統計的な有意差はみられなかった。今後、さらに研究を重ねていくことにより、この傾向がサンデーひろばのボランティア参加学生の学びの特徴なのかどうか、自己評価得点に何が影響を与えているのかといった「サンデーひろば」の学びのプロセスについて明らかにしていくことが求められる。

5. おわりに

本稿では、「サンデーひろば」へボランティアとして参加した学生が学びを深めていくための課題について考察した。その結果、①目標を定めて参加すること、②保護者との会話の促進、③学びのプロセスの明確化の3点が課題として挙げられた。

今後は、毎年度の募集の際に、「サンデーひろば」における体験の特徴を募集段階で積極的に伝えていくとともに、毎回の参加にあたっての目標の明確化、振り返りの仕組みの構築が求められる。

今回のアンケート調査では学年別の参加者に偏りがあったこともあり、学年別の学びの自己評価には統計的な有意差がみられなかった。今後、さらに研究を重ねていくことにより「サンデーひろば」の学びのプロセスについて明らかにしていくことが求められる。ただし、「サンデーひろば」のボランティア参加学生については、1回に参加できる人数の関係から全体として多くなかず、また1・2年生が多く、3・4年生は少ないという傾向にあるため、今後はアンケート調査による量的な分析だけでなく、インタビュー調査など質的研究の実施も検討していくことが求められる。

注

1) 「サンデーひろば」の概要については岡澤(2017)を参照。

文献

岡澤哲子(2017)「生駒市の子育て支援事業『サンデーひろば』におけるボランティア学生の学び」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要』2、19-27。